おいしい野菜ができるかな

今福保育所の園児が10月16日、同保育所で松浦東高校の生徒から指導を受けながら野菜の植え付け体験をしました。

食育の一環として3年前から実施しているもので、松浦東高生が野菜の苗を持参し、園児に野菜の植え付け方法などを教えています。

この日は、松浦東高生産流通科3年生の9人が、同保育所年長組の園児19人に、キャベツや白菜、ブロッコリー、大根など15種類の野菜の苗の植え付け方や種のまき方などを指導。園児たちは、約50個のポットの土を掘り、ていねいに植え付けていきました。

植え付けた野菜は、毎日園児が水をあげ、12月から3月ごろに収穫。給食でおいしく味わう予定です。

松延崇平君（今福・北東1、6）は「ミニトマトや大根の苗を植えました。毎日お水をあげます。おいしい野菜ができるのが楽しみです」と話してくれました。

青色回転灯パトロール隊を激励

青色回転灯防犯パトロール隊の激励式が10月18日、市役所北玄関で行われました。

今福、調川、御厨・星鹿地区の各連合防犯協会と市青少年健全育成連絡協議会、志佐地区健全育成会、市教育委員会では、毎月同パトロールを行っています。今回は、10月11日から20日までの全国地域安全運動の一環として市内をリレー形式で行ったものです。

黒田副市長は、「青色回転灯の防犯パトロールは、防犯効果が期待されています。松浦市の安全を願って、パトロール隊の活躍とパトロールの成功を願います」とパトロール隊を激励しました。

この日集まった青色の回転灯を装着した自家用車21台は、約2時間かけて市内の防犯パトロールを行いました。

1,000隻目の石炭船が入港

電源開発松浦火力発電所（西山千里所長）に10月7日、1,000隻目となる石炭船が入港しました。

同発電所は、1号機が平成2年6月、2号機が平成9年7月に営業運転を始めました。1号機試運転用燃料として平成元年11月に入港して以来、今回の分で約6,535万トンの石炭が搬入されたことになります。

1,000隻目は、イタリア船籍の「ORSOLINA BOTTIGLIERI号」（総トン数39,713トン）。約7万4千トンの石炭をインドネシアから運搬し、石炭の搬入作業が終わる10日まで滞在しました。

モンゴルから鷹島町を取材

モンゴル国の作家で、ジャーナリストのリンチン・ガンバト氏が10月8日、9日の2日間、鷹島町に取材に訪れました。

独立行政法人国際交流基金が、各国で活躍中の文化人・著名人に、日本文化に触れる機会を提供しようと招待したものです。

8日は、新作執筆のため地元の農家や漁師などを取材し、町内にホームステイしました。また、9日は、歴史民俗資料館など元寇ゆかりの場所を取材しました。

リンチン氏は「鷹島の人は温かい人ばかりでした。帰国したら鷹島のことを書きたいと思います」と話していました。

松浦よかとこ大使に志水彩夏（あやか）さん

各イベントで松浦市の魅力をＰＲする松浦よかとこ大使に志水彩夏さん（福島・播磨釜、20）が選ばれました。

志水さんは、松浦東高校を卒業後、現在はウェルサンピア伊万里に勤務しています。読書と買い物が趣味という志水さんは「親戚の推薦で応募しました。選ばれてびっくりしています。福島の棚田の夕日がきれいなので大好きです。おいしい魚や見どころなど、もっと松浦のことを勉強してＰＲしていきます」と話していました。

九電工が中央公園を清掃

九電工松浦営業所と関連事業所の職員が10月18日、中央公園の清掃を行いました。

九電工の「さわやかコミュニティ旬間」（10月19日～31日）に、社会貢献活動の一環として毎年行っており、これまでは、独居老人の自宅周辺の草刈り、カーブミラーや信号機の清掃を実施。今年は水軍まつりを前に会場となる中央公園を清掃したものです。

この日集まった８人は、約２時間かけてほうきやちり取りなどを使い、落ち葉やごみを片付けました。

松浦の特産品づくりに挑戦！

売上増進や業務の効率化目指す
―松浦物産出荷者協会が設立―

「松浦物産出荷者協会」の設立総会が10月12日、松浦海のふるさと館で開催されました。

同協会は、松浦物産（板谷國博社長）が運営する「松浦海のふるさと館」に農水産物などを出荷している生産者約400人で構成。会員相互の交流、売上増進や業務の効率化を図ることを目的に設立されたものです。

この日は、市内を中心に平戸市、伊万里市の会員約80人が出席。会長に羽山順一（じゅんいち）さん（御厨・小船）が選出され、今年度は、農業・漁業・商工業が一体になった地産地消のブランド作り、研修会・先進地視察の実施などを行うことなどが確認されました。

また、総会後、「米の販売に命をかけて60年」と題した唐房（とうぼう）米穀（唐津市）の横山健司（けんじ）社長の講演も行われました。

パッションフルーツを地元の特産品に
―ビニールハウスで栽培に取り組む―

パッションフルーツを地元の特産品にしようと、松浦物産出荷者協会の12戸の農家が栽培に取り組んでいます。

パッションフルーツは、南米の亜熱帯地域を原産とするトケイソウ科の果物。無農薬で育ち、ビニールハウスで寒さや台風の被害にあわないように気をつければ、他の果物に比べ手軽に栽培できる利点があります。一株に200～300個の実が付き、濃い赤紫色に熟すと自然に実が落果。甘酸っぱい果肉を味わうことができます。

短期間で量産、売上増進できることなどから栽培を始めたもの。今年２月に鹿児島県指宿市から購入した苗木約60本を、12戸の農家で育て、10月からその株のつるを苗床に挿し、苗を増やす作業に取り組んでいます。栽培農家数増大を目指しており、今後は１万鉢の苗を育てることが目標。収穫した果実は、ジュースやせっけん、種を使った調理用油などの加工品への試験を行っていきます。